

わが国における化粧の社会的意味の変化について ——化粧教育のための現象学的試論——

石田 かおり

On the Change of Meaning of Beauty in Japan —— A Phaenomenological Analysis for Beauty Education ——

Kaori ISHIDA

1. 研究の動機と目的

前論文（注1）に引き続き、本論文も児童・生徒を差し当りの対象とした化粧教育を構築するための研究の1つである。この化粧教育の必要性は次のようなものである。

近年化粧年齢の低下が目立つようになった。女子高校生の化粧は日常的な風景になっている。もっともよく見られる風景は、ビューラーで上瞼の睫毛を上向きにしたところにマスカラを何度も塗り重ね、そのため遠目にも目ばかり黒々と目立ち、リップグロスかそれに近い効果のあるリップクリームによって唇がぬめったような艶を放っている顔である。制服着用時にもこうした化粧をするので、顔と制服のバランスの悪さを筆者は強く感じるが、こうした顔と制服の組み合わせが「いまどき流行の女子高生」という記号になっていると考えられる。この化粧はそのまま女子中学生にも広まっている。さらに、スキンケアだけでなく休日や放課後の外出時に化粧すること自体は、女子小学生にまで珍しいことではなくなった。

こうした化粧の低年齢化が目につくようになったのは、1990年代後半以降のことである。そ

の背景に何が存在するのか。どのような意識の変化がこうした事態をもたらしたのか。児童・生徒を対象にした化粧教育を考える際に、社会における化粧の意味とその変化を把握することが不可欠である。そこで、本論文ではこの問題に焦点を絞って検討することにする。

なお、本論文で提案する化粧教育は、当面は児童・生徒を対象にしたものであるが、基本的な考え方はそのままそれ以外の対象にも該当するような、普遍的なものを目指している。それ以外の対象とはすなわち大人のことで、近年児童・生徒と同じく目覚しく化粧の領域に踏み込んできている男性もその範囲に存在する。これらの対象に適用するには方法や手順の点で多少変更する必要もあるかと予想されるが、基本的な知識や価値基準に関する教育として、あらゆる人を対象にしていることを、ここで断っておく。

2. 研究方法

（1）現象学的方法を採用する理由

本論文で扱う問題を分析し、あるべき価値観を見極め、提言に結びつける方法として、現象

学的方法を用いる。その理由は次の通りである。

現象学的方法は、物事の本質を洗い出すために考案されたため、問題の本質を見極め、さらにはあるべき姿を見極めるために有効であると考えられる。しかも哲学のみならず多方面の学問にも応用されて一定の成果を挙げている。たとえば、ゲシュタルト心理学は現象学なしには登場しなかったと言われる。臨床心理学、新行動主義心理学、社会心理学など心理学の多方面にわたって現象学は影響を与えている。社会学ではシュッツやデュルケムに強い影響を与え、現象学的社会学という分野が確立している。文化人類学ではエスノメソドロジーに大きな影響を与え、ギアーツのバリ島分析などがある。また、クーンのパラダイム論やモースやレヴィ＝ストロースらの現象学的人類学もそうである。生命科学ではフッサールの「経験世界」の概念がユクスキルやケーラーに大きな影響を与え、それがまたビンスワンガーらの臨床精神医学に影響を与えるといった関係がある。神経学の中に行動生物学や行動性理論が登場した背景にも現象学がある。言語学ではソシュールの理論確立に大いに影響した。このように、現代に至って大きく進展した学問の諸領域に広範囲に影響を与え、かつそれぞれの分野において一定の成果を挙げているのが現象学的方法であることから、現代の社会的な問題を扱う際に有効な手段であると考えられる。このような理由で現象学的方法を用いる。

現象学的方法は、現象学の創始者エドムント・フッサールによって提案・開発された。後にマルティン・ハイデガー、モーリス・メルロ＝ポンティなどの弟子たちによってさまざまな解釈が加えられ、哲学者によってその人独自の方法が開発されてきた。このため、現象学的方法にもいくつかの種類があるが、本論文では現象学的方法を正確に用いるために、現象学の創始

者フッサールの方法に従うことにする。それは次のようなものである。

(2) 現象学的還元

フッサールによれば、物事の真相を把握するためには、「現象学的還元」(注2)を行い、「本質直観」(Wesensanschauung)によって物事の本質を看取する必要がある。「現象学的還元」を行なった結果、本質を看取すべき対象は「生活世界」(Lebenswelt)においてさまざまな意味を纏っていることが判明する。「現象学的還元」は「生活世界」において付与されたさまざまな意味をすべて一時的に「括弧に入れ」て「事象そのもの」を見ることであるからだ。こうして「現象学的還元」を遂行した結果、「生活世界」における対象への意味付与の構造が明らかになる。現象学では本質を実体化することはしない。意味付与構造を明確にし、意味の網目構造の中で本質を位置づける。こうしたことをフッサールは「星座配列」(Konfiguration)、あるいは運動を伴う意味の変化の場合には「遠近法」(パースペクティブ Perspektiv)と表現している。

たとえば、「本質直観」の対象を人間とするならば、「動物である」、「哺乳類である」、「二足歩行をする」、「道具を使う」、「哺乳類のうち知能がもっとも発達している」、「幼形成熟である」、「遊び」をする、などといった人類学的・生物学的意味づけがある。これらのほかに、文学的に「人間」というときの意味、宗教学的に「人間」というときの意味、等々、多様な意味が付与されている。これらの意味をすべていったん「括弧に入れて」、すなわちいったん忘れて、人間とは何かを「本質直観」によって看取することを試みる。すると、これら多様な意味が人間の本質に「意味付与」されたその総体にわれわれは接していることが見えてくる。しかも文脈によってどのような意味が付与されてくるのかが違

ってくる。そのため経験による意味の異なりも生じる。こうしたことが「生活世界」における「人間」であり、その意味を文脈によってその都度了解しながらわれわれは生きていることが判明する。

本論文では「現象学的還元」を用いることで、化粧に付与された意味を明らかにする。

3. わが国における化粧の意味

(1) 化粧史研究の曖昧さ

化粧の意味を捉える上で、化粧史研究の根幹に存する問題に触れないわけには行かない。

わが国でいつ化粧が始まったのか、まったく不明である。わが国だけでなく、人類の化粧がいつ始まったかもまったく不明である。わが国における化粧の開始以来の化粧の社会的意味をすべて網羅できれば理想的であるが、それは不可能である。その理由は、化粧史自体が、学問的に実証しうる範囲が100年程度とも、江戸時代までとも言われているからだ。化粧は皮膚などの人体の表面に施すものであるため、死後短い日にちで消滅してしまうので、一次資料として残っているものがほとんどない。従って、化粧史研究は、生きた証言が可能な過去以前のもの、二次資料から構築する以外は考えられない。

二次資料の場合、写真や映像などの記録的映像資料がない時代は文献資料や絵画資料等から推測することになる。しかし、それらの資料が事実を表現したものであるのか、理想像などの架空的要件が入ったものであるのか、判断が困難である。たとえば錦絵のうち美人画には眉を描く規則があった。ふだんは眉を描かない大奥の中臈も、多くの者が眉を落とした江戸町人の既婚女性も、美人画として製作されたものには眉が描かれている。このように絵画資料をどう解釈するかには問題が残る。また、記録的映像資料の場合、それが全国の平均的な実態を映し

たものなのか、一部の地域の一部の層の特質を映したものなのか、根拠ある判断の上で取り扱わねばならない。このことも史実を確定する上での困難を伴う。

政治史や経済史などは為政者や歴史家が重要と認識することが多いために文献資料が多く残されている。それらの真実性には議論の必要はあるものの、資料が膨大なために検証可能な範囲はとても広い。しかしこうした「正統派」の歴史書には化粧に関する記述はほとんど見られず、文学作品や日記に登場する小さな記述を拾い集めるくらいしか文献もなく、そこから得る知見もきわめて限られたものにならざるをえない。

こうしたことから今日まで歴史学者は誰ひとり化粧史を己の本題として取り上げてはこなかった。学問として成立しないのだから当然のことである。しかし、他分野の研究者や在野の研究者による文献は少数ながら存在する。本論文では主としてこうした諸文献に基づきながら、わが国における化粧の社会的意味を洗い出すことにする。

(2) 成人女性の身嗜み

わが国最古の文献は『記紀』や『万葉集』などの奈良時代の書物である。それらには化粧に言及した箇所がわずかだが見られる。しかしそれらは、持統天皇に白粉が献上された記述であったり、自分の妻の美しさを「紅や白粉で粧う必要がない」と表現するなど、化粧の社会的意味づけを読み取ることのできるものではない。そこで、次の時代に資料を求めることにする。

化粧の社会的意味づけを読み取ることのできる最初の文献は『有職故実』とするのが化粧史的には妥当なところと考えられる。『有職故実』とは、一口に言えば朝廷や公家・武家の仕来たりを記した書物である。旧儀・先例を参考にし

て、事を執り行う際にはどのような着装でどのように行なうのかなどを調査して、その場にもっとも相応しいものを記したものである。この中に化粧に関する記述がある。たとえば成人式にどのような顔を作るのか、正月を迎える宮中の儀式に臨むときにはどのような顔で参内するのか、など、儀式における化粧の方法が詳細に記されている。最初の『有職故実』は平安時代に編纂されたものであるが、公家はこの内容を明治維新まで守り続けた。さらに、明治の西洋化政策で変容を被ったものの、それ以後も華族の儀式の教本であり続けた。

儀式における化粧のように、貴族の世界では、化粧は礼儀作法に則った身嗜みという意味が第一義であった。遣唐使が廃止され、いわゆる「国風文化」を迎えてから、貴族階級においては服装と同時に化粧法も大きく変わり、それ以後近年まで公家や天皇家の化粧として続けられた化粧法が確立した。それは、眉を取り去り(注3)顔全体に白粉を塗り、置眉をし(注4)、お歯黒をし、口元に紅を点す(注5)というものだ。この化粧は「白化粧」と呼ばれる。白化粧は貴族階級に始まって、武家の時代には武家の化粧として取り入れられ、やがて町衆にも取り入れられるようになり、化粧といえ取りも直さず白化粧を指し示す時代が、白化粧の始まりの国風文化の時代から明治中期まで続いた。つまり、日本の化粧はおよそ千年の長き間白化粧であったということになる。

当初この化粧は女性だけのものであったが、平安中期から男性も参加するようになった。男女ともに化粧をするようになるときには、成人の儀式のときから一生涯化粧をして過ごさねばならないものとなっていた。化粧は成人の証とされたからだ。もし化粧をせずに宮中に参内すれば、礼儀に反するばかりか、人としての品位や常識までも疑われ、場合によっては精神的に

正常ではないと受け止められた。(注6)それほどまでに化粧は礼儀作法として重要なものとされていた。

鎌倉時代以降武家政権の時代を迎えると、貴族の化粧法と同時に貴族社会における化粧の社会的意味も武家に引き継がれて行った。将軍家・大名家を始めとする身分の高い武家において、女性の化粧は身嗜みとされ、成人式を迎えた日から一生化粧をし続けなければならなかった。貴族と違う点は、男性の化粧は儀礼のとき以外は義務ではなく、本人の自由に任されていたが、女性の場合には日常の義務であったという点だ。ちなみに、武士の化粧は鎌倉時代の平氏に始まり戦国時代まで盛んであったが、江戸時代に入ってから戦乱が落ち着くと次第に廃れて行った(注7)。

大名家の中には「化粧書」と呼ばれる書物を編纂する家もあった。戦国時代以降、『有職故実』に倣って大名家各家で独自に儀礼の際の手順などを書き記した礼法の書物が編纂されたが、その中には必ず化粧についての記述がある。礼法の手順書が膨大なため、化粧の部分の独立させた結果、化粧書と呼ばれる書物が成立した。これらの書物においては、礼法と化粧は一体に扱われ、化粧が礼儀作法であったことは明確である。

やがて化粧が町衆の女性にも普及するようになると、町衆女性の間にも化粧の第一義は身嗜みという位置づけが広まり、そうした意識が醸成された。さらに、武家の化粧書や礼法書に倣った礼法の書物が、広い層の女性に向けて出版されるようになる。それは、幕府の武家支配政策の根幹をなしていた道德規範である朱子学を女性に適用した考え方に基づいて書かれている。女性の生き方を示した本では『女大学』がもっとも有名であるが、この『女大学』と同じ思想に基づいて女性の生き方を示すだけでなく、そ

こに日常生活の細部に至る、家事や行事や出来事と、それらの場合の対処法を示した実用的な書物が夥しい数出版された(注8)。現代風に表現すれば「家庭百科大事典」、あるいは「女性の一生大事典」といったものである。それらの書物にも必ず化粧が登場する。その際の記述は、化粧は女の嗜みであり、化粧をすることが道徳規範上重要で、化粧は道徳規範に従って社会生活を送っていることを示すものである、という姿勢が一貫して見られる。たとえば次のようなものが典型的である。(注9)。

化粧をし身嗜みを整えることは、愛嬌を得て徳を修める原点である。身体の穢れや不浄を取り去って清らかにし、礼を正しくする原点である。身体が清らかなら心も自然と正しくなるが、これは聖人も「女性の四徳」と言ってお挙げになっていることだ。中でも「徳容」といって徳と容を並べてお挙げになっている。徳とは身を修め家を治めることを言う。容は身嗜みを整えることを言う。容儀とは、化粧をして姿を正しくすることを言う。心と容儀はもともと一体なので、化粧をして身嗜みを整えれば、心も自然と清らかになり、父母に孝養を尽くし、嫁いだら舅・姑によく仕え、夫に貞節を守り、他人を敬い、召し仕えるものに慈悲深く、貧しいものを救い、老人を敬い、幼い子を慈しむこと、すべて愛嬌から発するものだから、朝早起きして毎日鏡に向かい、顔に化粧をし、身嗜みを整え、心の鏡に向かつては、悪を遠ざけ、善いことだけを映し、曲がったことをまっすぐにし、正しいことに従うならば、それこそほんとうに女の道を守り、化粧の誠を得たというべきことだ。

ところで、引用した佐山半七丸『女子愛嬌都風俗化粧伝』には、美容上の平等思想ともいべき考え方が一貫して見られる。家柄も生まれつきの容貌も問題ではなく、だれもがこの本の通りに努力をすれば美人になれるというものだ。その背景には礼儀作法を身に着けることが美人への道であり、化粧は礼儀作法であるという発想が存在する。

礼法さえ身に着ければ何とかなるといふ発想は、江戸時代中期から幕末にかけての武家と町衆の女子教育熱の背景にも存在している。江戸時代には、現代に匹敵する、あるいは現代を上回るほどの、化粧ブームと流行の隆盛を見ることが出来る。18・19世紀に化粧や女子礼法の書物が夥しく発行され、貸本制がさらに普及を促進したことを考えると、これは世界に類を見ないわが国の文化的特質といえることができよう。

江戸時代には流行も大きな力を持っていたが、それはあくまでも身分と礼儀作法に則った化粧の中で各自が工夫しながら流行を追うものであった。「徳容」の表現のように化粧と礼儀は一体であったからだ。

(3) 明治時代以降も化粧は礼儀作法

明治維新を発端とする西洋化・近代化政策は化粧にも及んだ。明治4年(1871年)の太政官令によって男性の丁髷を廃止する散髪が定められた。その前年の明治3年(1870年)には華族に対するお歯黒と眉を落とすことを禁止する太政官令も発せられた。これらが化粧における西洋化・近代化の代表的な例である。しかし明治になってからチューブ入りの練りお歯黒が開発されて人気商品になったことからわかるように、お歯黒は依然として続けられ、法律による効力もあまりなかったために、皇后が模範となってお歯黒と眉を落とすことを止めた姿を民衆に曝すことによってようやく国民の間でも廃れ

始めた。このことから、長年慣れ親しんだ化粧とその根幹に存する美意識はすぐには変わるものではなかったことがわかる。また、歴史上それまでは白一色であった白粉が肌に近い色のものになり始めたのは、明治も末から大正時代にかけてのことであった。

こうして政治の近代化・西洋化に後れて、大正時代までには化粧品と化粧法が西洋風の近代的なものに変わったが、化粧に対する意識と化粧の社会的位置づけには何ら変化がなかった。すなわち化粧の第一義は大人の女性の身嗜み、礼儀であった。この傾向は昭和になっても、太平洋戦争中も、戦後も変わることなく続いた。

(4) 「ボディコンシャス」が化粧の意味を変えた

化粧の第一義は大人の女性の礼儀である、という全国的な了解が完全に崩れ去ったのは、1990年代後半のことである。太平洋戦争後この意味が次第に薄れ始め、こうした意味の存在すら知らぬ世代が出現し、1990年代後半になると別の意味が台頭し、完全に定着した。しかしこの変化の契機は、それ以前に見つけることができる。それは1980年代前半のことである。

1980年代前半のわが国に、アメリカから「ボディコンシャス」という言葉と概念が流入し、瞬間に普及した。「ボディコンシャス」(body conscious)の原義は、文字通り身体を意識することである。すなわち常に自分の体型を意識して、よしとされる状態に保つべきであるという考え方だ。体型は自己コントロールできるもの、体型は自己責任、という考え方がここに存在する。「ボディコンシャス」の概念が普及するまでは「私が太るのは親が太っているせいだ」、「私が不細工なのは親が不細工だから」というように、顔も体もその形態は遺伝的に決められたものであって、個人の意思ではどうにもなるもの

ではないという考え方が一般的であった。

元祖アメリカにおける「ボディコンシャス」は、肥満に悩む者が多くなり、食生活と運動によって肥満を抑え、生活習慣病を抑制して健康を維持しようという気運が社会的背景として存在するが、当時の日本では肥満やそれによる生活習慣病がまだ国民的関心事にはなっていなかった。その代わりに、美しさにとって痩せていることが条件として定着し始めていたところであったために、痩せた美しさの美的価値観の定着・浸透を促進する方向性を持って普及した。

「ボディコンシャス」の根幹には可塑的身体という概念が存在している。可塑的身体の概念は、「体型は自己責任である」という風潮を生み出す。さらに、「体型は自己責任」という考え方の根幹には、身体の自己所有物の意識、すなわち己の身体は己が可処分権を持つという考え方が存在している。ここに身体的所有論の問題が浮上するが、この問題に関しての議論は既に数多くのものが出尽くしているので、ここでは問題点の指摘に留めておく。

「ボディコンシャス」という語と概念は、当初わが国では2つの流行現象となって普及した。1つは運動と食事によって痩せることである。当時流行した運動は、当時新しい業務形態として登場し急速に普及したフィットネスクラブとカルチャーセンターにおいて、ジャズダンスやエアロビクスをすることであった。食事の方ではダイエット食品ブームの始まりが挙げられる。それまではいかに体格を向上させて結核による死亡率を下げるかが食生活における健康の最大の関心事であり、少しふくよかなくらいの体型が女性らしく健康的で美しいという価値観であった。端的に表現すれば、健康と体格を向上する目的で(きわめて端的に言えば太るために)食事を摂ってきたが、それが健康のため・美容のために痩せる食事へと変化した(注10)。2つ

目の流行は服装上の流行である。痩せた身体を周囲の人にはっきり示すよう、身体にびたりと合い、その結果体型がはっきり見え、しかも襟切りや服の丈などの点で露出量の多い服装をすることである。「ボディコンシャス」を略した「ボディコン」という名称で当時知られていた服装だ。

わが国のみならず世界的に1980年代の「ボディコンシャス」を体現したシンボリック的存在は、アメリカの歌手マドンナである。マリリン・モンローの次を担う世界的セックスシンボルを自称したように、自身の身体を完璧にデザインした。もとのイタリア系の顔立ちと黒髪にぼちゃりした体型の無名の時代とは別人になって、アメリカンドリームを体現し世界的スターになったときには、金髪にして鍛えた身体をセクシーに見せる演出を考案した。セルフイメージは自分で作り出して手に入れるものであると同時に、社会的成功はそれに見合った身体的外見を伴うものであるということを、歌の内容以上に生き様と身体をもって示した。

体型は自己責任、可塑的身体、身体は自らの所有物であるからどのように扱ってもよい（可処分権を持つ）、これら一連の意識があって始めて、化粧の第一の意味が礼儀から個人の嗜好あるいは個人の利益へと変化しうる。ゆえに、われわれは近年の化粧の意味上の変化の発端を「ボディコンシャス」概念の普及に見出すことができる。

（5）社会優先の化粧から個人優先の化粧に

1995年に突如「女子高生ブーム」と呼ばれる現象が始まった。1995年時点の女子高生ブームとは、女子高校生が生活における種々の活動において独特の行動をした結果目立つ存在になり、その行動をマスコミがしきりに取り上げたものである。独特の行動はファッションや化粧は元

より、仲間同士で使う言葉や仲間同士の間でのコミュニケーション方法などがあった。当時歌手の安室奈美恵が女子高校生を中心とする若い女性に多大な人気を博し、服装と髪型と茶色に染めた髪の色、そして化粧の点で多大な影響を持つファッションリーダーであった。この流行における化粧は、細くカーブの激しい眉、丸く大きな二重瞼の目、小さい顔、日焼けした肌であった。安室奈美恵本人は北アメリカ（とくにニューヨーク）の黒人文化を音楽上の手本にしていたが、化粧においても生来の顔立ちをいかしながらもこうした化粧法を採り入れていたものと思われる。

こうした女子高生の化粧が、やがて他の世代の化粧をリードする形になった。当時、スキンケア化粧品は機能競争が盛んであったが（注11）、その一方でメーキャップの流行はファンデーションにベージュ系の口紅（注12）以外はほとんど何もしない、化粧感のないものであったために、メーキャップ製品の使用も限られたものであった。それが「女子高生ブーム」以後、メーキャップに使用する化粧品の種類が増加し、それまではごく一部の人か特殊な場合にしか使わなかった化粧品が日常化するきっかけを作った。マスカラ、付け睫毛、二重瞼にする糊、リップグロス、肌を光らせるパウダーなどである。見た目の印象もしっかりメーキャップをしているものになり始め、再びメーク隆盛時代へと向かい始めた。また、「女子高生ブーム」が始まってから数年もしないうちに、髪を茶色に染めることは性別も世代も超えて一般化し、「茶髪」と書いて「ちゃぱつ」と読む語も定着した。やがて髪の色は多様化した。眉を整えることもすぐに女性の間で年上の世代に広まり、男性にも普及し定着した。

化粧に対する意識と化粧の社会的意味の変化の背景に存在する化粧をめぐる社会的状況の変

化は、このような化粧隆盛時代の復活だけではない。化粧の社会的地位の向上もある。

1972年、ハーバード皮膚科学研究所（注13）が紫外線の人体に対する害悪が証明されたことを公表した。これを基に1989年から化粧品メーカーが、紫外線が皮膚の老化を促進する（注14）ことを盛んに社会に訴え始めた。（注15）ここに1990年代の化粧品の機能開発競争と、「美白」（びはく）の概念と美白化粧品と美白行動の普及が相俟って、21世紀が始まるまでには、化粧品は老化防止だけでなく健康にも役立つことが常識的知見になった。さらに、化粧が免疫機能を高めて病気の予防や回復に役立つことや、認知症やうつ病、PTSDの症状の軽減や回復に役立つことも、化粧品メーカーの活動によって広く知られるようになった。こうして化粧は健康にも役立つものという認識が形成され、21世紀を迎える頃には化粧の社会的地位が飛躍的に上昇した。それまでの長い間、化粧は成人としての義務であり礼儀なので必要なものとされてきたが、一方で化粧は粉飾であるという意識も存在し、化粧にはどこか後ろめたさがつきまとった。したがって過剰な化粧表現は不道德とされてきた。それゆえ、他人から化粧を褒められると、過剰な化粧をしたのではないかという不安が生じるため素直には喜べなかった。ところが、現在では化粧を褒められると多くの人は素直に喜ぶことができる。それは、医学を始めとする自然科学や心理学等の学問的研究成果が「お墨付き」の役割を果たして、化粧は自分の心と体の健康のためにするものだというので、堂々と、誰はばかることなく化粧ができる時代を迎えるようになったためである。

しかし、見方を変えればこのことが同時に、化粧の社会性を薄め、個人化を大きく促進してしまったということもできる。誰のために化粧をするか考えてみればわかることだ。身嗜み・

礼儀・成人女性の義務という時代、化粧は化粧の当事者を取り巻く人、すなわち社会のためにするものであった。しかし、化粧は外見の美しさを求め、同時に心と体の健康のためにするという場合は、化粧は化粧をする当事者のために行なうものという意味を持つ。化粧の第一の意味が社会から個人に変化したことが、近年の化粧の意味変化の根本をなすものである。そしてこのことは、ボディコンシャス以来わが国において醸成された可塑的身体、あるいは身体の可処分権の意識と、化粧の意味の個人化とは、価値観において同じものであるということになる。（5）でここ15年の化粧意識の変化の契機はボディコンシャスであると述べたのは、このようなわけである。

4. わが国の伝統における子供の化粧の社会的意味

これまでの結果かわかるように、長い間、児童・生徒のみならず就学前も含めて、未成年は化粧しないものとされてきた。しかし例外はあった。それについて見てみよう。

ところで、学校制度が開始する以前は「児童・生徒」という表現も存在していなかったので、以下は「子供」と表記する。

（1）祭祀の化粧

祭祀に参列する場合、子供も化粧をすることがある。たとえば地域の祭りで鼻筋に白粉を塗る化粧、稚児行列の白化粧などがそうである。七五三の化粧もその1つだ。最初に化粧したのはいつかという問いに対して七五三と答える人は、現在どの世代にも多く見られる。

祭祀の化粧にはハレを示す意味がある。聖なる非日常の時間と空間を表す化粧である。それは化粧の原初的な意味の1つであると考えられる。原始シャーマニズムにおいて、シャーマン

は化粧をすることで己の非日常性、すなわちハレとしての存在を示していた。祭祀の際には参列者全員が化粧をするが、それは祭祀のときには参列者もハレとしての存在であることを示している。労働し、生活のための営みをするケの時間・空間において化粧はせず、ハレの時間・空間において化粧をする、化粧にはそうした位置づけがあった。神仏などの超越的存在者はハレの時間・空間に存在していて、それらとケの時間・空間に存在しているわれわれ人間との間の媒介者はシャーマンである。したがって、シャーマンはケの時間・空間に存在しながらもハレの性質を持っているために、化粧をしていた。

わが国においては、「化粧井戸」、「化粧岩」、「化粧水」（けしょうみず）、「鏡井戸」、「鏡岩」などの旧跡が全国の神社に数多く残されている。これらのほとんどのものに、巫女が神前に出るときにそこで化粧をしたという伝説が存在している。こうした旧跡からも原始シャーマニズムにおいて化粧はハレの意味づけがなされていたことがわかる。そして、児童・生徒世代の化粧の是非を考える際には、こうしたハレの意味が1つの判断基準になるものと考えられる。

（2）一定の職業における化粧

わが国では伝統的に化粧は成人の証であり、成人の礼儀作法としての意味を担ってきたので、子供はそこから排除されてきた。しかし例外があり、その1つが先述のハレの化粧であったが、例外はまだある。化粧をしなければならない職業に就いている子供である。

たとえば江戸時代の遊郭の禿（かむろ）がそうである。（注16）客の前に出るときには大人と同じ化粧をして、決められた髪形と衣装を着けた。子供の役者も舞台に出て役を演じるときにはそれに相応しい化粧をした。大道芸など芸を披露して金銭を得る子供の中にも化粧をして仕

事に臨む者がいた。

これらの例は、見方によってはハレの意味の一種と考えることもできる。職業は糊口をしのぐための労働であるのでケととらえがちだが、遊郭は客にとってはハレの時間・空間であり、ハレであることを演出することで客から代価を取る場である。演劇における舞台空間や大道芸を披露している時間と空間も観客にとってはハレである。したがって、ハレの時間・空間における労働に携わる子供は伝統的に化粧をしていた、と表現することもできる。

（3）子供の化粧は原義を守っていた

化粧の原義を調べてゆくと、日本語においても、西洋各国語においても、宇宙との双方向の対話、宇宙とのコミュニケーション、宇宙との交歓という意味が共通に見出される。（注17）ここでの宇宙とは、天文学的な宇宙のみならず、他者、他の生物、存在することを信じている超越的存在者など、自分を取り巻くありとあらゆる存在者に、自分自身を加えたものである。すなわち化粧の当事者にとってのありとあらゆる存在者のことである。宇宙の異称に「万有」という語があるが、あるいは英語で表記すれば universe という語があるが、これらの語がここで言うところの「宇宙」の内容をよく表現している。化粧の持つハレの意味は、シャーマンや祭祀の参加者が超越的存在者とコミュニケーションをすることを表現している。禿は遊郭の客に向かって、子役は観客に向かって、それぞれが相手とコミュニケーションする存在であること、すなわち相手に向かって己が開かれていることを示している。祭祀の化粧も職業上の化粧も、いずれにおいても子供の化粧は、化粧の原義を忠実に守った形で存在していたということができよう。

大人の化粧もかつては原義を守ったものであ

ったが、その後意味が変化して1で見たようなものになったと考えるのが、歴史的流れから言うところと妥当なところであろう。それゆえ、大人の化粧の意味が変化しても、子供の化粧にはそれ以前の意味が残り続け、限定された場面における化粧として続けられてきたということになる。

1920年代に至って初めて、日本のみならず世界的にも、社会的地位を問わず国民的に化粧品が家庭の中にありふれたものになった。それ以前の長い間、化粧品はきわめて貴重で高価なものであったので、所持していた人の棲息地域や社会的地位が限定されていた。それゆえ世界的に長い間、化粧は富と権力の象徴とされ、王侯貴族は競って己を化粧で飾り立てた。女性より男性の方が化粧表現が目立つ例が世界に数多く見られるのも、男性が女性より社会的地位が高く権力も富も握っていたことが多いためである。そうした時代に化粧が庶民の日常のものになることは不可能であった。化粧が長い間ハレの意味を担ってきた背景にはこうした事実も存在していた。それに対して子供は富と権力によって秩序付けられた大人の世界の範囲外の存在であると位置づけられていたために、子供の化粧にはハレの意味が残ったものと推測される。

結語

今日の化粧年齢の低下は、1980年代の「ボディコンシャス」概念の流入がもたらした「体型は自己責任」という風潮が潜在的条件となり、1990年代の化粧の社会的地位の急激な上昇の影響と、1990年代後半の「女子高生ブーム」が直接の発端となったことがわかる。しかし歴史上の長きに渡り、1990年代半ばまでは、日本における化粧の意味は「成人女性の身嗜み」であり続けた。このことは、現在でも軽視できない事実である。電車内化粧に不快感を持つ人が少なくないのは、本来自宅で人目につかぬところで

整えるべき身嗜みの過程を公衆の面前で突きつけられること、喩えれば、人前で突然着替えを始めることに直面したようなものであるからだ。ここにも長い歴史における化粧の意味が、私たちの潜在的な意識に残っていると考えることができるのではないか。

児童・生徒の化粧教育を考える上で、こうした化粧の伝統的意味は無視できないものである。この事実を教えることで、己の化粧行動を考えさせることが、化粧教育にとって不可欠であると考えられる。

注

- 1 石田かおり「児童・生徒の化粧実態とその問題点」、『駒沢女子大学研究紀要第13号』、駒沢女子大学、2006年12月、27～41ページ。
- 2 序章1（2）における「 」に入った語はすべてフッサールの術語であり、哲学界的に日本語訳が定着している語を用いる。哲学界的に決まった訳語を使用するため、本論文ではすべてに原語を示すことはしない。厳密に述べれば、これらの術語は主として『イデーニ I』に掲載されている意味で使用する。生涯己の打ち立てた現象学の厳密化を図り続けたフッサールの場合、他の哲学者と異なり執筆時期による術語の意味のふれがないため、出典の明記も必要ないと判断する。主要な出典は参考文献を参照。
- 3 抜く、剃る、の2つの方法があり、どちらにするかは本人に任されていた。
- 4 円形や楕円形が多かったが、眉を描くことを「眉を置く」と言い、このような行為全体を「置眉」（おきまゆ）と言った。
- 5 現実の唇の2分の1程度の大きさに描くため、その小ささから「点す」（さす）と表現されるようになった。現在では「口紅を塗る」

- 「口紅を描く」と言うのが一般的だが、この表現は唇の大きさの違いをも表現しているものと捉えることができる。
- 6 次の例が典型的なものであろう。『堤中納言物語』の中の「蟲めづる姫君」は年頃になっても眉を抜かずお歯黒もせず、人間は化粧で取り繕うのがよくないと言って、一切化粧をしない。そうして多くの人が気持ち悪く恐ろしいと思う虫に名前をつけて愛でる毎日を送っていた。そんな姫君は人々に奇行・変人ととらえられ、親も娘は人目につかない方がよいと考えて屋敷の奥に隠すようにして住まわせていた。姫君に近づく人は褒美欲しさに虫を捕らえて持参する男の子たちだけだった。しかしあるとき、姫君の噂を聞き好奇心を抱いた若者が様子を見に来た。若者にとっての姫君の印象は、化粧をすれば美しくなりそうだと思われて悪くはなかったが、姫君は男女のやりとりを知らず、その気もなく、虫のことばかりで変わることはなかった。(出典『日本古典文学全集13落窪物語・堤中納言物語』、松尾聡、寺本直彦校注、岩波書店、昭和37年、現代語訳は筆者) この姫君が変人と描かれたのは、ひたすら虫を好み虫に明け暮れた生活だけではない。時期が来ても化粧をしないことでその変人ぶりを表現している点に注目すれば、当時の化粧の意味を読み取ることができる。
- 7 武士の化粧の意味は礼儀作法ではなく、富と権力の象徴と、主君に対する忠誠心の表現(とくにお歯黒)、武士の意地(敵方の武将に見せる首が美しくなければ個人的にも一門にとっても恥であるという意識)という意味であったことが、平和な時代を迎えて武士の化粧が廃れた大きな要因と考えられる。
- 8 たとえば『女重宝記』、『女鏡秘伝書』など。中でも化粧に限定したものには、注9(引用文献)のほかに『容顔美艶考』、『化粧眉作口伝』がある。
- 9 佐山半七丸著、高橋雅夫校注『女子愛嬌都風俗化粧伝』、平凡社(東洋文庫)、1982年。103ページ。現代語訳と「」付けは筆者による。この書物は1813年(文化10年)に初版が出て、1923年(大正12年)の関東大震災で版木が焼けて版を重ねられなくなるまで、110年間刷り続けられた。それだけでも化粧の指南本として世界に類を見ない驚異的なロングセラーであるが、江戸時代は貸本が発達していたので、読んだ人の数はわからないくらい膨大だ。その上、美容情報は口コミで広まる性質を考えると、江戸時代後期から大正時代までの日本女性のきわめて多くが何らかの形でこの中の一節を耳にしたことがあるくらい、親しまれた書物ではなかったかと推測される。
- 10 痩せた女性が美しいという意識の最初は1920年代から30年代にかけてのフラッパー、日本では摩登ガールの流行に見られる。次に1960年代のファッションモデルツイギーの例もある。しかしそれらは都市在住の流行に敏感な一部の層での流行にとどまり、全国的レベルでの意識の変化には結びつかなかった。ここでは性別・年代を問わず全国的に痩せることが美と健康と善に結びついた契機になった出来事を取り上げている。
- 11 1990年代前半の化粧品業界は「機能戦争」と呼ばれた時代を迎えていた。シーズ開発による化粧品の機能(配合成分による効果)の開発・強化が急激に増加し、各社が機能を競い、消費者の間に化粧品に機能を求める気運が高まった。以後化粧品の機能は前提となる必要条件になってしまった。
- 12 口紅だけでなくネイルエナメルもベージュ系で唇や爪のものとの色とあまり変わらない印象の色が流行した。それらを総称して「ヌー

ドカラー」と呼ばれた。

- 13 ハーバード医科学大学とマサチューセッツ総合病院と資生堂の共同設立により、1989年にボストンに作られた皮膚科学研究機関。この研究知見をもとに次のような1972年のセミナーと翌年の出版が行なわれた。小堀辰治、安田利顕監修、『光と皮膚 資生堂創業100年記念光と皮膚のセミナー記録集』、金原出版、1973年。
- 14 しみとしわの原因になることがもっとも強く喧伝され、広く知られていることである。ほかに、免疫機能の低下、遺伝子に傷をつけることによる癌の危険性の増大などの健康上の悪影響もある。
- 15 1989年株式会社資生堂が始めた「資生堂フォーラム」がこの知見を一般向けに啓蒙的に知らせた最初のイベントである。そのフォーラムの標語は「サクセスフル エイジング」という。
- 16 太夫・天神などの上級遊女に仕えて、太夫らと共に客席にも出る10歳前後の遊女の見習い。
- 17 次に挙げる筆者の研究を参照。石田かおり『おしゃれの哲学』、理想社、1995年189～191頁、222～230頁。

参考文献

Edmund Husserl “Ideen zu einer Reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie”, Erstes Buch, Husserliana Bd. III, 1, Martinus Nijhoff, 1976.

エドムント・フッサール、渡辺二郎訳『イデー I』 I・II、みすず書房、1979年、1984年。
滝浦静雄ほか編『講座・現象学④現象学と人間科学』、弘文堂、昭和55年。